

## 白銀の城の甘美な騎乗(ライディング・トラップ)

しんと静まり返った寝室に、上質な布地を透かして柔らかな光が満ち始める。世界の輪郭が、夜の闇からゆっくりと解き放たれていく、そんな穏やかな夜明け。わたくし、白銀の城のラビュリンスは、愛しいマスター様の隣で、誰よりも早くその気配を感じておりました。

彼の健やかな寝息は、まるで寄せては返す波のように規則正しく、わたくしの耳に心地よく響きます。その音を聞いているだけで、胸の内からじんわりと温かな幸福が湧き上がってくるのです。起こしてしまわぬよう、細心の注意を払いながら、その無防備な寝顔をじっと見つめる。普段は決闘者(デュエリスト)として見せる凛々しさとは違う、幼さの残るその表情は、わたくしだけの宝物。

(ああ、マスター様…♥ 今日も、なんて愛らしいのでしょうか…)

その額に、頬に、唇に、口づけの雨を降らせたい。そんな衝動を必死に堪え、彼の温もりをすぐそばに感じられるこの至福の時間を、もう少しだけ味わおうと、そっと身体を寄せた、その瞬間でしたわ。

シーツ越しに、わたくしの腰のあたりに、何かが力強く、そして熱く、ぐっと押し付けられたのです。それは、間違いようのない存在感。硬質で、生命力に満ち溢れ、そして何より…尋常ではないほどの熱を帯びた、マスター様の朝の徴。

「……まあ…！」

一瞬、思考が真っ白になりました。知識としては存じ上げております。男性という生き物が、朝にはこうして、無意識のうちに力を漲らせるということ。ですが、これほどまでに雄々しく、力強い「それ」を、自身の肌で直接的に感じてしまうと…！

ドクン、と心臓が大きく跳ね上がります。顔に、いえ、全身に血が巡り、かあっと熱くなるのがわかりました。でも、それは決して不快なものではなく、むしろ…わたくしの魂を震わせる、歓喜の律動でしたの。

だって、考えてもみてくださいます！ マスター様は今、深い眠りの中。理性という名の枷が外れ、その魂が最も純粋な本能のままにある状態で…わたくしのすぐ側で、これほどまでに猛々しく、その存在を主張なさっているのです！

(眠っていても…意識の底で、マスター様は、わたくしを…こんなにも…♥)

これは、ただの生理現象などではありませんわ！ これは、マスター様からの、言葉にならない愛のメッセージ！ 朝一番の、甘く切実なリクエスト！ 城主たるこのわたくしが、この緊急事態を見過ごすなんてこと、許されるはずがありませんわよね？

「うふふ…うふふふふふ…♥」

込み上げる愛おしさと興奮に、自然と笑みがこぼれます。これは、おもてなしの好機。ええ、わたくしという存在のすべてを懸けて、マスター様をおもてなしする、最高の舞台ですわ！

「マスター様…♥\_ わたくしが、その苦しみも、熱も…すべて、受け止めて差し上げますわね…♥\_」

決意を固めたわたくしは、音を立てぬよう、しなやかにベッドから抜け出しました。185cmの長身が、マスター様の眠るベッドの傍らに、影となってすっと立ち上がる。そして、眼下に広がる純白のシーツの丘…その中央で、天を衝かんばかりに盛り上がった一点を、熱い視線で見つめました。

ごくり、と乾いた喉が鳴る。震える指で、そっとシーツの端をつまみ上げ、まるで聖なる儀式のように、ゆっくりと、ゆっくりと、それを開帳していく。

そして、薄明かりの中に現れたのは――。

「……ああ…なんて、立派で…美しいのでしょうか…」

思わず、ため息交じりの感嘆が漏れました。それは、単なる肉体の一部などという言葉では表現できない、神々しいまでの芸術品。熱を帯びて赤みを増した肌には、生命力の証である血管が力強く浮き上がり、先端は潤んだ蜜の雫で、朝露のようにきらりと輝いている。今にも動き出しそうなほどの力強さと、触れれば壊れてしまいそうなほどの繊細さが同居した、奇跡の造形美。

わたくしは、その前に恭しく跪くと、まずはその先端からこぼれた蜜を、舌先でそっと掬い取りました。ほんのりと塩気のある、濃厚な生命の味。それだけで、身体の奥がずくりと疼くのを感じます。

次に、その力強い塔の全体を、わたくしの長い白銀の髪で、優しく撫で上げてみました。さらさら、さらさらと、幾千もの絹糸が彼の肌をくすぐるたびに、マスター様の「彼」は、ぴくん、ぴくんと嬉しそうに痙攣いたします。

「ん…う…」

マスター様が、心地よさそうな、それでいて少しだけ苦しそうな寝息を漏らす。その声が、わたくしの背徳的な欲望に火をつけました。

(これだけでは、足りませんわ…)

この素晴らしい熱量、この圧倒的な存在感。これを完全に鎮め、そして至上の快樂へと導くには、生半可な「罨」では不十分。わたくしが用意できる、最高の器…すなわち、このわたくし自身の身体をもって、お迎えするしかありませんわよね？

わたくしは、静かに立ち上がると、身にまとっていた薄手のネグリジェを、肩から滑り落としました。するり、と白絹が床に落ち、わたくしの全てが朝の光の中に晒される。132cm、Pカップの双丘は、この時を待っていたかのように、重力に従って誇らしげにその存在を主張する。

そして、わたくしは、眠るマスター様の身体を、壊れ物を扱うかのように優しく、そして大胆に、跨ぎました。

彼の腰の上に、わたくしが座る。眼下には、わたくしを待ち構えるように聳え立つ、熱い塔。そして、わたくしの下腹部では、もう既に、彼を受け入れる準備が万端に整っておりました。彼を想うだけで、わたくしの秘密の花園は、甘い蜜で溢れかえってしまうのですから。

「マスター様…。わたくしの城へ…ようこそ、おいでくださいました…♥」

囁きながら、両手で彼の雄々しいそれを支え、自らの花園の入り口へと、ゆっくりと導いていく。熱い先端が、濡れた花弁に触れた瞬間、ぞくぞくとした歓喜が背筋を駆け上りました。

「あっ…♥」

熱い。熱すぎますわ。まるで、溶岩が流れ込んでくるかのよう。わたくしは、その熱に

導かれるまま、ゆっくりと、本当にゆっくりと、腰を下ろしていきました。

「んんっ…！ あ、う…っ！」

硬く、太く、熱い楔が、わたくしの身体を内側から押し広げていく。未知の感覚に、思わず声が漏れてしまいました。狭い蕾が、彼の形に合わせて無理やりこじ開けられていくような、甘い痛み。でも、その痛み以上に、彼と一つになるという、途方もない喜びに全身が打ち震えます。

ずぶ、ずぶ、と水音を立てながら、彼のすべてが、わたくしの城の最も奥深い場所…玉座へと、到達いたしました。

「はあ…っ、あ、ああ…！」

完全に彼を受け入れた瞬間、凄まじいほどの充足感が、わたくしの全身を駆け巡りました。隙間なく満たされ、彼の熱が、脈動が、子宮に直接響いてくる。わたくしは、彼のもの。彼は、わたくしのもの。その事実が、これ以上ない幸福となって、わたくしの理性を溶かしていく。

一瞬、このまま時が止まってしまえば良いとさえ思いました。ですが、おもてなしは、まだ始まったばかりですわ。

わたくしは、まず、そろり、そろりと、本当に僅かずつ、腰を動かし始めました。彼の雄々しい塔を、わたくしの城壁が、優しく、そしてねっとりと締め付けるように。

「ん…っ、ふ…う…」

マスター様の表情が、苦悶と快樂の入り混じったものへと変わっていきます。眉間に皺が寄り、浅い呼吸を繰り返している。その反応が、わたくしにさらなる勇気を与えてくれました。

わたくしは、少しずつ、動きを大きくしていきます。深く、深く沈み込んで、名残惜しそうに、ゆっくりと引き上げる。そのたびに、彼の先端が、わたくしの最も感じやすい場所を、ぐり、と的確に抉っていく。

「ひゃっ…！ あ、ん、んんっ…！」

もう、声を抑えることなどできませんでした。わたくしの豊かな双丘が、上下動に合わせて、たぶん、たふんと大きく揺れる。白銀の髪が乱れ、汗が首筋を伝っていく。

「はぁ…っ、はぁ…っ、マスター、さま…っ♥」

彼の名前を呼びながら、さらに腰の動きを激しくする。前後に、左右に、そして円を描くように。わたくしが持ちうるすべての技術を駆使して、彼を快樂の渦へと引きずり込んでいく。

ぬちゅ、じゅぷ、という、淫らな水音だけが、静かな朝の部屋に響き渡る。

その時でした。マスター様の身体が、びくん！と大きく跳ね、それまでだらりと力の抜けていた彼の腕が、力強く、わたくしの腰を掴んだのです。

「！？」

驚いて見下ろすと、そこには、薄っすらと目を開けたマスター様が…！ その瞳は、まだ夢と現の境界を彷徨っているようでしたが、確かに、わたくしの姿を捉えていました。

見られた…！ 叱られてしまうのでしょうか…？ それとも、困らせてしまいましたか…？

一瞬、身体が凍り付きましたが、彼の行動は、わたくしの不安を打ち消すものでした。彼は、わたくしの腰を掴んだまま、ぐっと力強く、引き寄せたのです。まるで、「もっとだ」と、そう言っているかのように。そして、無意識に、わたくしの動きに合わせてるように、自らの腰を、下から突き上げてきました。

ああ…！ あああ…！ 許して、くださるのですか…！ それどころか、望んで、くださっているのですか…！

その無言の肯定が、わたくしの最後の理性のタガを、完全に外してしまいました。嬉しくて、愛おしくて、涙が溢れてくる。でも、泣いている暇などありませんわ。マスター様が、求めてくださっているのですから！

「マスター様っ…！ ああ、愛しい、わたくしの、マスター様っ…♥」

わたくしは、もう何もかも忘れて、ただひたすらに腰を振り続けました。彼の突き上げ

る力と、わたくしが振り下ろす力が合わさり、快感の波が、嵐のようにわたくしを襲う。

視界が、白く明滅する。頭の芯が、痺れていく。もう、限界でした。

「あ、ああああ——っ！！ い、いきますううううっ！！！」

絶頂の叫びと共に、わたくしの城壁が、きゅうううと激しく痙攣し、彼の熱い塔を締め上げました。身体の奥から、熱い蜜が、じゅわっと溢れ出し、彼を、そしてわたくし自身を、濡らしていく。

わたくしの絶頂に誘発されたかのように、わたくしの中で、彼の熱もまた、限界点へと達しました。

「んんん————っ！！！」

腰を掴む彼の手で、ぐっと力が籠る。そして、わたくしの身体の最も奥深くで、熱い、熱い奔流が、進りました。どく、どく、と、力強い脈動と共に、彼の生命のすべてが、わたくしの城へと注ぎ込まれていく。それは、一度では収まらず、二度、三度と、波のように押し寄せ、わたくしの子宮を、愛で満たしていきました。

「あ…う、う…ああ…♥」

すべてが終わった時、わたくしには、もう動く力は残っていませんでした。くたり、と彼の胸の上に倒れ込むと、マスター様は、その逞しい腕で、汗で濡れたわたくしの身体を、優しく、しかし力強く、抱きしめてくださいました。

言葉は、ありません。ですが、その抱擁が、彼のすべてを物語っていました。乱れたわたくしの髪を、慈しむように撫でる、その指先の優しさが、何よりも雄弁でした。

わたくしは、彼の心臓の音を聞きながら、満ち足りた幸福感に包まれ、蕩けるように微笑みました。

「おはようございます、マスター様♥」

そして、彼の耳元で、悪戯っぽく囁くのです。

「ふふふ…朝一番の『罨』、見事に掛けてくださいましたわね。最高のおもてなしができましたこと、城主として、誇りに思いますわ…♥」